

ハーツホーン 野村正七訳

地理学方法論

——地理学の性格——

地理学ほど、その本質・対象・方法について多く論ぜられた科学はすくないであろう。

十九世紀に近代地理学が巨匠達によつて確立されて以来、現在に至るまで、同じような問題——例えば、二重の意味の二元論(系統科学か記載科学か、自然科学か人文科学か)、「地域」は実在する概念か否か、「地域区分」の意義と方法など——が未解決のまま繰返して議論されている。

本書はハーツホーン教授が、このような地理学の性格を明らかにするために、一九三九年「Annals of the Association of American Geographers」誌上にモノグラフとして二号にわたり掲載され、その後大幅な増補を加えて、一九四六年に米國地理学者協会から出版されたものの邦訳である。ややもすれば実地調査に専心して、本質論への反省をなおなりにしがちな傾向にあつた米國地理学界に対して、ドイツ学派のポレミクをいつかりふまえた原著の出現は大きな刺激を

与えた。戦後、わが國の地理学界が同様の傾向にある時、親しく原著者について学ばれた野村氏によつて、本書が邦訳された事はまことに時宜をえたものといえよう。

十二章、六百頁にもわたり、緻密な論理構成をもつ本書の内容を、限られた紙数で紹介する事は誤解を生ずる恐れが多く、また原著については、松井勇氏がすでに早く昭和十六年、「地理学評論」誌上に詳しく紹介されているが、順序としてきわめてあらひ本書の素描を試みることにしよう。

まず、第一章「序論」に於て、学史研究の重要性を強調し、次の第二章「歴史的発展からみた地理学の性格」において、学史に基づいて地理学の性格を論じる。要約すると、十八世紀後半の科学者・哲学者の著作の中に、地域的差異に注目した近代地理学の先駆的業績がみられ、すでに「系統地理学」と「地域地理学」(地誌)との二元論がめばえていたが、未だ具体的研究成果には乏しかった。この地域的差異という概念を事実の上に具体化した二巨匠は Alexander von Humboldt と Karl Ritter であり、地理学は“die irdisch erfüllenden Räume der Erdoberfläche”

(K. Ritter) を研究する学であると定義された。二人は共に「自然の統一」という思想をもつていたが、どちらかといえば、Humboldt は系統地理学を、Ritter は地域地理学(地誌)を重視し、また前者は非人間的現象に、後者は人間に関心を抱く傾向があつた。この学風の相違が後継者たちに影響を与え、地理学は分裂の危機に瀕したが、Hettner が「系統地理学を土台にした地域地理学」を提唱して、二巨匠への復帰の道がひらけたとする。

次の第三章「歴史的コースからの偏向」に於て、十九世紀末に流行した地理学は精密自然科学に属さねばならないという主張や、「自然対人間」の関係を究明する科学であるという定義を、著者は地理学の正統からはずれるものとして否定する。第四章は「地理学はコログラフィ的科學である」という歴史的觀念の「証明」と題されて、「地理学は地域的差異を研究する学である」という世間の常識を前置きし、次に Kant, Humboldt, Ritter の「空間的關係を取扱ふのが地理学である」という定義のへて Hettner によりこの考えが確立された、と学問上の位置づけを行つて常識を学史の上から正当化した。

第五章以下では具体的な方法論上の概念や手続きの吟味に入る。第五章「景観——“Landschaft”と“Landscape”」において、地理学の重要な概念である Landschaft というドイツ語は二重の意味——地域と可視的な地球表面——を有しているため、非常な混乱を招くので、英語の region と Landscape という語に使いわけた方がよいと提言し、Landscape の研究は地域研究の手がかりとはなるが、必ずしも地域研究の本質の対象ではないと景観至上学派を批判する。第六章「史学と地理学との関係」では、地域研究には歴史的考察が不可欠ではあるが、過去の事実現在の個々の事象を作りだした要因の説明のため、必要に応じて取上げられれば充分であり、一方「歴史地理学」は過去の任意の時点における地理学であり、各時期に応じて別々に成立するいわば別個の地理学であると主張する。第七章は「地理学の取扱う事象を感覚によつてつかまれる事物に限定する事」と題され、Schiller, Granö, Passarge などの景観学派は地理学の対象を可視的物質的事象に限定する。しかし、非物質的要素が除外されれば、その研究は個々の要素の単なる寄せ集めにする

ぎなくなり、統一ある地域を理解することは不可能になる。景観学派は、外的表現にしかすぎない景観にとらわれるのみであり、機能と地域相互の位置関係を見失っていると、厳しく批判する。

第八章「地理学においてデータを選択する場合の論理的根拠」では、研究の際のデータを選択する基準として、Hettner は「(1)隣接して存在する事物の空間的結びつきとその場所による相違、(2)一つの場所に於て統合されている互いに異つた自然界の間の因果関係」の二つをあげており、この基準を具体的に適用するに当つて、原著者は「(1)諸現象の相互関係、(2)地域的差異、(3)空間的拡がりをもつ表現」の三点を考慮しなければならない、と Hettner の立場を推進する。第九章では「具体的単位体としての地域概念」と題して、Schiller, Passarge などは、「地域」とは「具体的実在」時には「有機体」であると考えているが、原著者はこれらが全く根拠はなく、かつ「地域は実在する」と強調する人々は、地理的ファクターの中で最も基本的なものの一つである地表現象の相互関係位置を無視する結果に陥つていると批判し、「地域」は具体的実在でなく、恣意的な地表の一区分にする。第十「世界を地域わけする方法」に於て、原著者は地域は実在的客体ではないが、地表を地域区分する事の大きな意義を認めている。原著者の考えを要約すると、地域区分には主観の介入は避けたいが、首尾一貫した原理により、systematic に行われねばならない。地域区分には小単元を集めて大単元を設定する帰納的立場と、大単元を小単元に分割する演繹的立場とがあるが、実際問題としては相互を折衷しなければならない。また地域区分の方法には、Hettner 式の大地域から小地域にわけ、それらが互いに隣り合つて全体を構成する特殊的地域区分と、Henderson 式の類似した要素の内容を基準とし、類型毎に地域を設定する一般的地域区分の二つがあり、前者は実際の地域的關係の輪廓、後者は内的性格に従つての分類といえる。

一般的類型地域設定は相対的位置關係を無視する点に、地理學的觀點からは不満足な点が多く、地域を確立するというよりは、せいぜい領域を設定するにすぎない。しかし文化的事象の要素を複合して、一般的類型地域を

設定する方法は實際上有効であり、その方法としては、「景観被覆に基づくものと、土地利用に基づく方法との二つがあるが、所詮これらの方法はせいぜい特殊地域を認識するという最終的課題へ近づく手掛りを与えるにすぎない」と、その長所と限界を論じている。

最後に、第十一章「地理学はいかなる科学か」。第十一章「結論」に於て、地理学の学問的性格を総括して、地理学は他の系統科学とは異なり、地域で互いに異つた現象がどのようにに關係しあつて統合されているかを究明し、世界に關する知識を組織づけて、相互に關係のあるシステムを確立する科学であると、地理学の使命を論じる。そのアプローチの方法には系統地理学の立場と地域地理学の立場との二つがあるが、二つの研究方法は共に相補すべき地理学の本質的研究方法であり、この意味における二元論は統合されねばならない、と結んでいる。

以上を通過してみると、原著者は主に Hoerner の流れをくんで、地理学が内包する複雑曖昧な性格を、学史にのつとりながら系統づけて説明している。従つて、Schlüter, Passarge, Grano, Sauer などの所謂景観学

派とは方法論的に鋭く対立している。

その立場はともかく、本書は方法論に關する基本的な「古典」として、今後その生命を保持しつづけるであろう。発表されて以來、二十年近い歳月を閲した今日、邦訳されて多くのわが国の地理学徒に対して反省と指針を与えることにならう。だが常に問題となるのは、方法論と具体的な地域研究との間のギャップであり、本書の理路整然たる方法論を、実地研究に適用する場合、細かい技術上の諸問題に關して、多くの困難に遭遇しよう。

評者の卑見によれば原著者の農業地域や工業地域の研究においても、本書の主張と矛盾する若干の安易な妥協がみとめられる。このよきな実地研究上の難問に対する原著者のなやみを卒直に例示して記述されていれば、更に示唆されるところが多かつたと思われる。

しかし、二十年という年月はやはり、評者には時代の隔たりというものを感じさせる。近年綿密に行われている地域研究の結果や、他科学のアイデアの影響により、地理学の根本概念である「地域」という概念にも変化がみられている。すなわち、従来の等質的な地域概念に対して、機能の結びつきを重視し

た異質性の統合にもとづく地域設定が提唱されている。本書の地域区分の議論に於て、未解決な問題として留保されている都市や工業地帯の地域区分に關しては、この新しい地域概念で位置づけできるようになった。また最近、生態学や社会学の方法をとり入れる事によつて、地域構成要素間の計測が行われるようになり、地域区分をできるだけ客観的なものへ近づかせようと努力されている。従つて本書はあまりにも「主観的恣意」を不可避なものとして強調しすぎているような印象をうける。本書が主張している地域的差異を究明し「地域」を科学的に組織づけるためには、本書のような「古典的」な地理学的アプローチのみをもつては、不可能であるというのが現状ではなからうか。

なお、訳本を原文に丁寧にも照合する余裕をもたなかつたが、概ねよみ易く、殊に Natur, Landschaft などの多様な意味をもつ語に対しては苦心して訳されており、この大著を良心的に翻訳された訳者に対して心から感謝の意を表明して、紹介の筆をおく。(A5版五八三頁 定価一〇〇〇円 朝倉書店)